

氏 名 (本籍)	は 羽 岡 健 史 (兵 庫 県)
学 位 の 種 類	博 士 (医 学)
学 位 記 番 号	博 甲 第 6210 号
学位授与年月日	平成 24 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
審 査 研 究 科	人間総合科学研究科
学 位 論 文 題 目	うつ病による長期休業者の職場復帰支援手法に関する研究

主	査	筑波大学教授	薬学博士	熊 谷 嘉 人
副	査	筑波大学教授	博士 (医学)	望 月 昭 英
副	査	筑波大学教授	博士 (保健学)	市 川 政 雄
副	査	筑波大学准教授	博士 (医学)	森 田 展 彰

論 文 の 内 容 の 要 旨

(目的)

近年、心の健康問題による長期休業者の増加が大きな問題となっている。心の健康問題による休業者の中には、再休業をする事例や、職場復帰が困難である事例が多いという特徴がある。厚生労働省から職場復帰支援のマニュアルが公表され、企業において職場復帰支援が広く取り組まれるようになりつつあるが、依然として職場復帰後の再休業や、復帰が困難な事例が多い現状にある。職場復帰後の再休業が多い原因の1つとして、職場復帰可否の正確な判断が非常に難しいということが挙げられている。

このような背景を受け、心の健康問題による長期休業者の職場復帰を支援するために、長期休業者を対象とした職場復帰を目的としたリハビリプログラム（以下、リワークプログラム）が広く取り組まれるようになっている。リワークプログラムが職場復帰を支援する上で有用であることは経験的には報告されているものの、実証的な研究は始まったばかりである。

そこで、本研究においては、うつ病が原因で長期に休業している労働者の認知機能と抑うつ度の関連を明らかにすることを目的として、横断調査を実施した。さらに、職場復帰の可否を判断する上で重要と考えられる要因が、リワークプログラム中にどのように変化するのか明らかにすることを目的に、縦断調査を実施した。以上の2つの調査研究を通して、心の健康問題による長期休業からの職場復帰をより効果的に支援するための知見を得ることが本研究の目的である。

(対象と方法)

・横断調査

某医療機関でのリワークプログラムを2008年7月から2010年2月までの期間に利用を開始したうつ病患者22名を対象に、自記式質問紙と認知機能検査を用いて調査を実施した。性別、年齢、休業月数、長期休業の回数その他、抑うつ度の指標であるCES-D (The Center for Epidemiologic Studies Depression Scale) に対して、自記式質問紙で回答を求めた。認知機能検査には Stroop Test、Trail Making Test、三宅式記憶力検査を用いた。

抑うつ度と認知機能の関連を検討するため、対象者をCES-Dによるカットオフ値で抑うつ傾向群と正常群に2群化した上で、認知機能検査の成績の差を比較した。

・縦断調査

上記の横断調査と同一施設で、リワークプログラムを2008年7月から2011年6月までの期間に利用を開始した、うつ病患者39名を対象に調査を2回実施した。第1回調査はリワークプログラムの利用を開始した第1週に、第2回調査は職場復帰する直前の週に実施した。2回の調査の調査項目は同一のものとした。調査項目は、性別、年齢の他、休業状況として休業月数、長期休業の回数、生活背景として配偶者と子供の有無について自記式質問紙を用いて調査を行った。また、横断調査と同様にCES-Dの他、ストレス対処能力の指標としてSOC (Sense of Coherence)、ストレス対処行動の特性の指標としてBSCP (Brief Scales for Coping Profile)、対人関係における認知や行動の指標としてSGE (Self Grow-up Egogram) を調査した。認知機能検査は横断調査と同じ3検査 (Stroop Test、Trail Making Test、三宅式記銘力検査) を用いた。

(結果)

1. うつ病による長期休業者の抑うつ度と認知機能の関連

CES-D 得点によって分類した正常群 (10 名) と抑うつ傾向群 (12 名) の間に、認知機能検査の成績に差は認めなかった。また、先行研究による健常者の成績と比較して、いずれの群も Stroop Test と Trail Making Test の成績が低い傾向にあった。一方、三宅式記銘力検査の成績は、健常者の成績と同等であった。

2. リワークプログラムにおける職場復帰に関連する要因の変化

27 名の対象者から平均追跡期間 112.3 ± 72.3 日で 2 回の調査データを得た。

リワークプログラムの利用期間中に CES-D の平均値は有意に低下し、SOC 総得点ならびに SOC 下位項目の得点は有意に上昇した。BSCP では、6 つの下位項目のうち、「積極的問題解決」、「問題解決のための相談」、「気分転換」、「視点の転換」の得点が有意に上昇し、「回避と抑制」の得点が有意に低下していた。SGE では、5 つの自我状態のうち、CP (Critical Parent) と AC (Adapted Child) の得点が有意に低下し、NP (Nurturing Parent) と FC (Free Child) の得点が有意に上昇していた。

認知機能検査では、Stroop Test の全 3 種のテスト、Trail Making Test の全 2 種のテストのいずれにおいてもリワークプログラム利用期間中に成績の改善が認められた。三宅式記銘力検査では、2 種のテストの各 1 ～ 3 回の全ての成績において有意な変化が認められなかった。

(考察)

職場復帰の可否を判断する際、主治医が職場復帰可能と判断しても、必ずしも直ちに職場で求められる業務遂行能力を有しているとは限らない点に注意することが推奨されてきた。本研究の横断調査において、うつ病による長期休業者がリワークプログラムを利用開始する段階では、抑うつ気分が改善していても認知機能の低下が認められた。この結果は上記の推奨を実証的に裏付けるものであると考えられる。

本研究の縦断調査において、ストレス対処に関連する因子の変化は、いずれもストレス耐性の向上や、ストレス反応の緩和に作用するものであった。また、認知機能検査も全般的に改善していたことも併せると、リワークプログラムの利用期間中に職場復帰と復帰後の再休業予防に向けた準備が整えられるものと考えられる。

審 査 の 結 果 の 要 旨

本研究は、うつ病の症状と職場復帰準備性の乖離やリワークプログラムの効果について実証的に検討している研究である。現在、うつ病の社会復帰は注目される課題であり、本研究の社会的意義は高い。また、本研究では、概ね寛解に至った以降のうつ病患者の認知機能の変化を追跡していること、うつ病患者の中でも職場復帰を目指す休業者のみを対象としている点で研究のフォーカスが絞られ、先行研究と比してもその獨創性を認める。しかしながら、本研究は、対照群の設定が困難であった点、リワークプログラムの特性上対

象者の確保も大学院在学中では比較的少数になったため、リワークプログラムの効果に関し、より正確かつ詳細な検討が十分には行えていない点が今後の課題と言えよう。

平成 24 年 1 月 11 日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士（医学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。